

『インターネット技術を活用したマルチリンガル言語運用教育システムと教育手法の研究』,  
基盤(B)(2) 課題番号 14310218, 東京外国語大学, 2005, 126-137.

## 中国語文法プロフィール

三宅 登之  
東京外国語大学外国語学部助教授

### 1. 文法プロフィールの対象者

この中国語プロフィールは、大学での第2外国語で、週2コマ(90分×2コマ)の授業を通年(半期 Semester×2期)受講する学生を対象として想定している。週2コマの1年間で初級を終えて、次の年次の週2コマ通年の上級に進むのが、現在の日本での大学の第2外国語中国語のカリキュラムとして一般的なパターンである。従って、この中国語プロフィールは、ほぼ全ての大学の第2外国語の初級文法の枠組みと考えるとよいであろう。<sup>1</sup>

現在、大学の第2外国語教育としての中国語の授業では、一部の学生たちの中国語学習の動機付けの欠如などの様々な理由により、初級文法の場合において多くの文法事項を盛り込んでも学生が消化しきれない(あるいは授業ですべてを終えることができない)という現実がある。そのような現実を反映して、市販されている数多くのテキストも、近年は内容がスリムになる傾向が顕著である。

ここで述べる中国語プロフィールは、内容的には初級文法としてカバーできる項目をほぼ網羅できるよう意欲的に取り込んだ。従って、実際には多くの第2外国語の教室の場では、このプロフィールにある項目すべてを丹念に学習するということがない授業もありうる。ここではそのような現実が存在することは認識しつつも、初級文法としてカバーできる最大公約数的な範囲すべてを取り入れたので、内容的には多くの市販の初級テキストよりは豊富なものになっている。

### 2. 記述レベルに関する個別言語的特徴

中国語文法プロフィールの記述レベルに関する個別言語的特徴は、何と言っても「形態」というレベルが存在しない(従って初級文法項目として扱わなくてよい)という点につきるであろう。

印欧語と異なり、中国語には狭義の形態変化は存在しない。印欧語の形態変化で表される文法的意味は、中国語においては主に、語順と、「虚詞」と呼ばれる文法的機能語の2つを用いて表される。

語順の例としては例えば

(1) 我打他。(私は彼を殴る。)

(2) 他打我。(彼は私を殴る。)

において、この二者を区別しているのは語順以外にない。“我”(私)と“他”(彼)のどちらが動作主で、どちらが被動者かという意味役割の違いは、語の格変化で示されるのではなく、動詞“打”(殴る)の前に位置しているもの(主語)が動作主で、後に位置しているもの(目的語)が被動者だという語順によって示されるのである。

---

<sup>1</sup> 日本の中国語教育の現況については、日本中国語学会中国語ソフトアカデミズム検討委員会編 2002『日本の中国語教育』, 好文出版, を参照。

虚詞を使った例としては例えば次のようなペアを考えてみたい。

(3) 我把他打了。(私は彼を殴った。)

(4) 我被他打了。(私は彼に殴られた。)

ここでは介詞“把”の後に被動者が、介詞“被”の後に動作主が置かれ、二者の使い分けによって異なった文法関係が表されているわけである。

形態変化がないという事実から必然的に、特定の品詞の活用表を学習し覚えるといった学習事項は中国語には存在しないという結論が導かれる。結果的に中国語プロフィールの記述レベルはすべてが「統語」レベルの扱いということになるのである。

先に中国語には「狭義の」形態変化がないと述べたが、先行研究ではつぎのような現象をいわば広義の形態変化と考えているものもある。

- ・“们” (名詞の接尾辞で複数を表す)
- ・“了” “着” “过” (動詞の接尾辞でアスペクトを表す)

しかし、中国語では名詞が複数の時に必ず“们”をつけるというような強制的な規則はないので、その有無で厳密に単数と複数が区別されているわけではない。逆に“们”は当該の名詞を1つの群れとしてとらえた表現なので、数量詞をつけた“\*三个学生们”は間違いになってしまう。また、“了”なども

(5) 我们调查、研究、分析了当时的情况 (私たちは当時の状況を調査し、研究し、分析した)

のように、動詞の並列連語に付いたりすることもあるので、通常は独立した語 (アスペクト助詞) と扱う。

本プロフィールでも、中国語には形態変化はなく、上のような現象は語と語の組み合わせ (フレーズ) の問題として処理している。

### 3. 品詞分類、カテゴリー分類に関する個別言語的特徴

中国語で品詞という概念を扱う際にまず確認しておかなければならないのは、上で述べたように形態変化のない中国語においては、語の文法的機能 (どのような文法成分になりうるか、どのような語と共起するか) が品詞を決定する際の基準となるので、品詞を決定するのが困難な、辞書によって品詞判定がまちまちな語が数多く存在することである。<sup>2</sup>

中国語の品詞にはそのような特徴があることはあるが、品詞自体は存在するし、初級文法の場合でも品詞に言及せざるを得ない項目もある。同じ主語と述語から構成される文でも、動詞述語文と形容詞述語文では性格が異なるし、例えば形容詞述語文での“很”などの程度副詞と文終止の問題など、形容詞に関する規則だと教えなければならないので、必然的に動詞や形容詞という品詞に言及することになる。また、量詞、介詞、助動詞などは、品詞そのものが初級文法項目となっているので、ある程度の解説は避けられない。

中国語の初級文法で品詞を扱う際、学習者を混乱させる要因となっているのは、品詞の名称の不一致である。「不一致」というのは、1つの文法体系の中での不一致ということではなく、先行研究における諸家の扱いがばらばらな場合があるということである。中国語においては、いくつかの品詞に関して、その品詞名が辞書や学習書、テキスト等によってまちまちな命名をされているものがある。以下のようなものがその不一致の例である。

<sup>2</sup> 中国語の品詞の概説については、三宅登之 2003 「語法6講」 (連載、『中国語』4月号～9月号) を参照。(第1講「中国語の品詞はいくつあるか」、第2講「中国語の品詞の決め方」、第3講「辞書の品詞表示」、第4講「兼類について」、第5講「動詞と名詞の境目」、第6講「品詞決定の難しさ」)

(6) 介詞——前置詞

(7) 動態助詞——アスペクト助詞

(8) 代詞——代名詞

(6)や(7)は、いずれも左側の用語が中国語での言い方をそのまま借用したもの、それに対して右側の用語は、日本で（英文法等で）なじみのある言い方や、より実態がわかりやすい（と思われる）用語を用いた例である。(8)も、左の「代詞」が中国語の用語である。これを英語式に分かりやすく言い換えたのが右の「代名詞」であるが、この場合中国語の“代詞”は名詞の代わりをしているだけではないので（“这么”“这样”などがある）、厳密に言うと「代名詞」は不正確なネーミングとなる。しかしそれは承知の上で、より学習者の分かりやすさを優先して「代名詞」を採用する場合もあるので、文法上の厳密性と学習者の分かりやすさのどちらを優先するかが問題になるところである。

いずれにせよ、学習者にとってみれば、テキストや参考書によって品詞の名称がばらばらでは学習上の混乱を引き起こしかねない。中国語の場合、他の文法成分の名称などにも同様の問題があるので（「様態補語」か「程度補語」か「状態補語」かなど）、ぜひ解決していかなければならない問題である。

#### 4. 内容に関する個別言語的特徴

中国語文法プロファイルの内容上の特徴は大きく以下の3点にあると言える。

##### I. 形態変化の学習がない点

これは上記2. でも述べた点である。中国語は印欧語と異なり、格変化や動詞の活用等の形態変化がないので、中国語の初級（初級に限らず上級でも）文法では、形態論的な学習内容は皆無である。その分、語と語の意味関係が捉え難く、上級に進むほど解釈に苦勞する点が増えてくる。複文のレベルにおけるいわゆる「意合法」も、形式としての虚詞を明示せず、文脈に依存して意味を表すという点では共通の現象である。

(9) 他来，我去。

表す意味①彼が来るから、私は行く。

②彼は来るが、私は行く。

③彼が来るなら、私は行く。

④彼が来ても、私は行く。

##### II. 品詞レベル、構文レベル、表現レベルが混在している点

中国語文法プロファイルを一見してわかることだが、初級文法では①品詞レベルの項目、②構文レベルの項目、③表現レベルの項目があり、それらが混在しているという特徴がある。それぞれの項目には例えば

①品詞レベルの項目：人称代名詞、指示代名詞、量詞、助動詞、介詞など。

②構文レベルの項目：動詞述語文、反復疑問文、連動文、存現文、“把”構文など。

③表現レベルの項目：年月日・曜日・時刻の言い方、値段の言い方、命令表現。

などがある。そして実際に学ぶ際にはこれらが順序の上で入り混じって提示される。一例として、初級テキストの最初の課を考えてみよう。例

例えば「主語＋動詞（＋目的語）」の動詞述語文を学ぶとする。これは構文レベルの項目である。ここで実際に、

(10) 他来。(彼は来ます。): 主語＋動詞。

(11) 我喝啤酒。(私はビールを飲みます。): 主語＋動詞＋目的語。

のような例文を作る場合、当然のことながら、主語に当たる箇所に来る人称代名詞は項目として説明しなければ、文全体の説明が成り立たなくなるのである。この人称代名詞は品詞レベルの項目である。

また、上記分類で「命令表現」を表現レベルの項目に入れたのは、中国語には文法形式としての命令文が存在しないからである。中国語には表現意図としての命令文が存在するだけで、それを生成する統語上の規則はない。命令の語気は、個別の語彙や、文全体のイントネーションを使って表される。

### III. 文法と個別の語彙の語法の境界があいまいである点

中国語では文法のことを“语法 yǔfǎ”と言う点がこのことをよく表している。中国語の文法は初級から中級、上級へ学習が進むに従って、個別の語彙の用法の学習という色彩が強くなる傾向がある。中国の対外漢語のテキストでも、初級レベルでは本プロファイルがあげるような項目が提示されるが、中級や上級になると文法欄で解説されているのは専ら常用される重要語の用法である。

本プロファイルの中の項目で一例をあげよう。介詞は独自の項目を設けて介詞全体の学習をする。ところがこれ以外に、“比”を用いた比較構文や、“把”構文を独自に重要な文法項目として学習するわけだが、“比”も“把”も介詞であり、介詞フレーズが連用修飾語になった構文である点では他の一般の介詞を用いた構文と何ら変わりはない。

(12)

	主語	介詞フレーズ		述語部分
		介詞	目的語	
介詞を用いた文	我	在	图书馆	看书。
“比”を用いた比較構文	我	比	他	大三岁。
“把”構文	我	把	这本书	看完了。

しかし“比”も“把”も重要な構文を構成する介詞として別扱いで提示されるのが常である。また逆に、他の介詞も別個に文法項目として立てていけない理由はないわけで、そこに厳密な境界線は存在しない。

品詞レベルの例として副詞の問題を考えてみる。中国語には“不”を用いた否定と、“没(有)”を用いた否定の2種類がある。これは様々な述語に関連する「否定」という文法的テーマだが、“不”も“没(有)”も品詞としては副詞であり、否定形の学習は別の観点から見れば、個別の重要な副詞の用法を学習しているとも言える。実際、範囲副詞“也”や“都”は非常に早い段階で取り上げることが多い。では“就”と“才”は項目として取り上げるとか、反復義を表す“再”“又”“还”は取り上げるとかという、テキストによって扱いはまちまちである。これらが非常に重要な副詞であるのはもちろんであるが、個別の語彙の語法の問題になるので、どこまでは文法項目として取り上げるべきで、どこからが辞書の記述に任せるべきかという明確な境界線は存在しないのである。

## 5. 文法プロフィールの課題・問題点（文法学習上の課題）

文法プロフィールの課題や文法学習上の課題として、次の3点を挙げる。

### I. 辞書との境界の問題

上記4. III. で述べたことと関係するが、中国語の文法は個別の語の語法であるため、文法規則の大枠の一般化は可能であるものの、個別の語彙によって例外が少なくなく、結局は中級、上級と学習が進むに従って、個別の語法（例えば重要な動詞の用法など）をそれぞれ覚えていかなければならないということになり、学習者の負担は大きい。これは文法書が究極的には辞書に行き着くということである。どこまでを初級文法の方で担当し、どこからは辞書の記述に任せればよいかという点について、検討する必要がある。

### II. 文法用語の整備

これも上で言及したように、中国語では現在、品詞名（「介詞」と「前置詞」など）、文法成分名（「様態補語」「程度補語」「状態補語」など）で、辞書やテキスト、学習書などによって名称が不統一になっているのが現状である。これでは学習者に不必要な負担を与えることになってしまうので、統一することが必要である。

### III. 用例の問題

語学学習において用例が生命線であることは言うまでもない。当該の文法項目にとって適切な良質の例文を用いる必要がある。ところが文脈依存型言語の中国語の場合、前後の文脈から切り離された単独の例文1文だけが提示されても、それがどういう場面で使われる文なのかを判断しにくいものが少なくない。このような意味や使用場面を把握しにくい例文を用いては、学習者の学習効率を低下させてしまう恐れがあるので、例文はシンプルでかつ意味の明白なものを厳選していくべきであろう。

## 6. 参考文献

- 北京大学中文系现代汉语教研室编 2004『现代汉语(重排本)』, 商务印书馆。  
北京语言文化大学汉语水平考试中心编 1998『中国汉语水平考试大纲(基础)』, 现代出版社。  
北京语言学院编 1980『基础汉语课本(一)~(四)』, 外文出版社。  
北京语言学院编 1981『实用汉语课本(一)~(四)』, 商务印书馆。  
樊平、刘希明、田善继编 1988『现代汉语进修教程 语法篇』, 北京语言学院出版社。  
房玉清 2001『实用汉语语法(修订本)附习题解答』, 北京大学出版社。  
李德津、程美珍 1988『外国人实用汉语语法』, 华语教学出版社。  
刘月华、潘文娉、故韡 2001『实用现代汉语语法(增订本)』, 商务印书馆。  
卢福波 1996『对外汉语教学实用语法』, 北京语言学院出版社。  
吕叔湘主编 1999『现代汉语八百词(增订本)』, 商务印书馆。

- 吕文华 1994 『对外汉语教学语法探索』, 北京语言学院出版社。  
——1999 『对外汉语教学语法体系研究』, 北京语言文化大学出版社。  
马真 1997 『简明实用汉语语法教程』, 北京大学出版社。  
孙德金 2002 『汉语语法教程』, 北京语言文化大学出版社。  
孙瑞珍主编 1995 『中高级对外汉语教学等级大纲(词汇・语法)』, 北京大学出版社。  
赵永新编著 1992 『汉语语法概要』, 北京语言学院出版社。  
朱德熙 1982 『语法讲义』, 商务印书馆。  
朱晓星主编 2002 『简明汉语语法学习手册』, 北京大学出版社。  
相原茂編 1996 『中国語学習ハンドブック 改訂版』, 大修館書店。  
相原茂・石田知子・戸沼市子 1996 『Why?にこたえる はじめての 中国語の文法書』, 同学社。  
荒川清秀 1998 『中国語文法システム 15』, 同学社。  
古川裕 1998 「基礎段階のガイドライン: 文法項目についての私案」, 全国中国語教育協議会 1998 年度第 2 期セミナーハンドアウト。  
——2001 『チャイニーズ・プライマー—New Edition—』, 東方書店。  
金丸邦三 1994 『中国語四週間』, 大学書林。  
木村英樹・張麗群・楊凱榮・吉川雅之 2003 『現代汉语基础』, 白帝社。  
興水優 1985 『中国語の語法の話—中国語文法概論—』, 光生館。  
李臨定著、宮田一郎訳 1993 『中国語文法概論』, 光生館。  
守屋宏則 1995 『やさしくくわしい中国語文法の基礎』, 東方書店。  
中川正之 2000 『初級文法テキスト 中国語のしくみ』, 朝日出版社。  
西川優子編 2003 『中国語教育研究会 研究会報告記録集』, 中国語教育研究会。  
瀬戸口律子 2003 『完全マスター 中国語の文法』, 語研。  
杉村博文 1994 『中国語文法教室』, 大修館書店。  
東方書店「簡明実用漢語課本」編集部 1998 『簡明実用漢語課本』, 東方書店。  
依藤醇 1989 『初めて学ぶ中国語』, 語研。  
全国高等学校中国語教育研究会編 1999 『高校中国語教育のめやす』, 全国高等学校中国語教育研究会。  
( <http://www.tjf.or.jp/xiaoxi/ijdata.htm#> )

## 7. 中国語文法プロフィール（内容）

番号	文法テーマ	品詞分類	カテゴリー分類	内容
001	動詞述語文	動詞	動詞述語文	動詞述語文の基本語順 否定形 副詞“也”“都”の位置
002	“吗”疑問文	語気助詞	疑問文	諾否疑問文 イントネーションによる諾否疑問文
003	人称代詞	代詞	代詞	代名詞と代詞という名称 “我们”と“咱们” “你”と“您”
004	“是”構文	動詞	動詞述語文	否定形 疑問文
005	指示代名詞	代詞	代詞	“这”系と“那”系 “～些”の系列 口語の発音
006	名詞句の連体修飾語と“的”	構造助詞	修飾語	“的”の有無での意味が異なる例 “的”の省略条件
007	反復疑問文	文構造	疑問文	目的語がある場合の語順 你看不看京剧？你看京剧不看？
008	疑問詞疑問文	代詞	疑問文	什么，谁，什么时候，哪儿
009	疑問詞“怎么”	代詞	疑問文	方法・方式の意味と原因・理由の意味
010	選択疑問文	文構造	疑問文	A 还是 B？
011	省略型疑問文	語気助詞	疑問文	～呢？ 「～は？」
012	語気助詞の“吧”	語気助詞	疑問文, 命令文	念押し・推量の意味と提案・勧誘の意味

013	数の言い方	数詞	数量表現	数の言い方
014	“几”と“多少”	数詞	数量表現	「いくつ」と“几”と“多少”の用法の違い
015	年月日・曜日の言い方	数詞	数量表現	年月日・曜日の言い方 名詞述語文
016	時刻の言い方	数詞	数量表現	～点～分 ～点半，～点～刻，差～分～点
017	年齢の言い方	数詞	数量表現	～岁 年齢の尋ね方
018	値段の言い方	数詞	数量表現	～块～毛～分 値段の尋ね方
019	所有の“有”	動詞	動詞述語文	否定形“没有” 疑問文
020	量詞	量詞	数量表現	数詞＋量詞＋名詞の基本語順 「この～」「あの～」の言い方
021	存在の“有”	動詞	場所表現	「場所＋“有”＋人/物」の基本語順 否定形“没有”
022	所在の“在”	動詞	場所表現	「人/物＋“在”＋場所」の基本語順 否定形“不在”
023	方位詞	名詞	場所表現	単純方位詞と複合方位詞 場所化マーカーとしての“里”と“上” 名詞のトコロ性
024	場所を表す指示代名詞	代詞	場所表現	这儿(这里)，那儿(那里)，哪儿(哪里) 名詞をトコロ化させる機能
025	形容詞述語文	形容詞	形容詞述語文	形容詞述語文と程度副詞 お飾りの“很” 否定形，疑問文
026	様々な連体修飾語と“的”	形容詞/構造助詞	修飾	形容詞の連体修飾と“的”

				動詞, フレーズの連体修飾語 “多”と“少”
027	連用修飾語と“地”	構造助詞	修飾語	連用修飾語と“地”の使用と省略
028	形容詞の重ね型	動詞	重ね型	性質形容詞と状態形容詞 状態形容詞の用法 状態形容詞の語尾“的”
029	介詞	介詞	介詞	連用修飾語としての介詞フレーズ 常用介詞の例
030	“除了～以外”	介詞	介詞	“除了～以外 / 之外” 排除関係と添加関係
031	“连～都/也～”	介詞	とりたて表現	様々な成分が取り立てられる場合
032	全面否定	副詞	否定表現	“一” + 量詞 + “也/都” + “不/没” “一点儿” + “也/都” + “不/没” 疑問代名詞 + “也/都” + “不/没”
033	連動文	動詞	連動文	連動文の形式からの分類 連動文の意味からの分類
034	可能を表す助動詞	助動詞	助動詞	能, 可以, 会
035	願望・義務を表す助動詞	助動詞	助動詞	要, 得, 应该
036	動詞の重ね型	動詞	重ね型	動詞の重ね型文法的意味と表現意図 動詞の重ね型形式的特徴
037	動作の回数・動量詞	動詞	動作量表現	動量詞 目的語との語順
038	動作の時間	動詞	動作量表現	目的語との語順
039	経験を表す“过”	アスペクト助詞	アスペクト	経験を表すアスペクト助詞“过” 否定形と疑問文
040	終結を表す“过”	アスペクト助詞	アスペクト	終結を表す“过”

				否定形と疑問文
041	アスペクト助詞の“了”	アスペクト助詞	アスペクト	動作の実現を表す“了” 否定形と疑問文 文終止の問題
042	語気助詞の“了”	語気助詞	アスペクト	アスペクト助詞“了”と語気助詞“了”の違い 表現意図
043	“了”と数量表現	アスペクト助詞	アスペクト	動詞+“了”+数量 動詞+“了”+数量+“了”
044	近接未来の表現	副詞	アスペクト	快要 / 就要 / 快～了
045	進行を表す“在”	副詞	アスペクト	在 / 正在 / 正～(呢)
046	持続を表す“着”	アスペクト助詞	アスペクト	持続を表す“着”と用いられる環境 進行の“在”との違い
047	結果補語	動詞, 形容詞	補語	否定形 行為の結果性 文法化の程度(慣用的結果補語)
048	動詞+“在”	動詞	補語	構造の分析 “在”+場所+動詞と動詞+“在”+場所の違い
049	単純方向補語(1)	動詞	補語	来, 去
050	単純方向補語(2)	動詞	補語	上, 下, 进, 出, 回, 过, 起, 开, 到
051	複合方向補語	動詞	補語	“来, 去”+“上, 下, 进, 出, 回, 过, 起, 开, 到” の組み合わせ
052	方向義と派生義	動詞	補語	“起来”(開始), “下去”(継続), “出来”(識別), “下来” (残存)等の抽象的な派生義
053	目的語との語順	動詞	補語	目的語=場所の場合 目的語=移動可能な物の場合
054	可能補語	動詞	補語	結果補語からの可能補語, 方向補語からの可能補語 可能の助動詞との違い

055	特殊な可能補語	動詞	補語	～得 / 不了 ～不起, 来不及, 对不起
056	様態補語	動詞	補語	否定形, 疑問文 目的語の処理 他说汉语说得很好。
057	程度補語	動詞	補語	～极了, ～死了 ～得很, ～得不得了, ～得慌
058	“比”を用いた比較表現	介詞	比較	A +比 +B +～ (+…)
059	“没有”を用いた比較表現	副詞	比較	B +没有 +A +～ “不比”を用いた表現
060	“跟～一样”を用いた比較表現	介詞	比較	A +跟 +B +一样 (+～) 否定形, 疑問文
061	“一点儿”と“有点儿”	量詞	数量表現	“一点儿”と“有点儿”の違い 組み合わせる成分の意味特徴
062	存在文	動詞	存現文	場所/時間 + 動詞 + “着” + 人/物
063	現象文	動詞	存現文	場所/時間 + 動詞 (+結果/方向補語) (+ “了”) + 人/物 出現を表す文と消失を表す文
064	使役構文	動詞	動詞述語文	“叫 / 让 / 请” + 人 + 動詞句 広義の使役動詞 日本語との対応「～させた」と「～するように言った」
065	二重目的語構文	動詞	動詞述語文	動詞 + 目的語1 + 目的語2
066	命令文	動詞	動詞述語文	“吧”を用いた表現 “不要”“别”を用いた禁止表現
067	離合動詞	動詞	動詞述語文	動詞 + 目的語構造の動詞 更に目的語を伴った際の処理
068	“把”構文	介詞	動詞述語文	“把”構文の表す意味, 表現意図 述語動詞部分の特徴

				“把”の目的語の制約
069	受身文	介詞	動詞述語文	“被”“叫”“让”の違い 受影文としての構文 被害や迷惑の意味
070	“是～的”構文	動詞	動詞述語文	“是～的”構文の焦点の当て方 目的語の後置 もう一つの“是～的”構文
071	複文と関連語句	文構造	複文	複文の種類 常用する関連語句の用法
072	“越～越～”	副詞	複文	越～越～ 越来越～
073	“一边儿～一边儿～”	副詞	複文	“一边儿～一边儿～”“一面～一面～” “着”を用いた連動文との関係
074	“一～就～”	副詞	複文	“一～就～”の意味と用法
075	連鎖指示	代詞	複文	疑問代詞を前後で呼応させる用法 (疑問詞の非疑問用法)